

屍ノ精神～Grave to  
the none～

サナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「私はきつと、狂っていたのだろう」

望まれはせず、称えられもせず、嗤われることすらない。

嫌われもしなければ、拒絶されることも、舐まれることも。

その精神は光を失っていたのだろう。

やがて降りる悪意に、男は瞳を開くのだろうか。

覺

目次

1



## 覚

怖い、見ているモノ全てが私を呪いまくし立てる。

魚からトカゲ、虫に猿そして人。全てが全て私に語るのは「生まれてくるな」。

そうだね、私が生まれれば、貴方達は悲しみ苦しむよね。みんな自分が苦しむ事を嫌うから私を拒絶するんだ。

果ての見えない暗闇の底に、光が開いた。恐怖で心が落ち着かない、いや・・・

嫌だ

嫌だ！

嫌だ!!

私を生まないで!!!

「大丈夫か？」

「あ、れ？おとうさん・・・？」

オレンジ色の淡い光が私を出迎える、横に顔を動かすとお父さんが何時も通り、頭をボリボリしながら本を読んでいる。

「だいぶうなされてたぞ、全く風邪なんだから雪だからと、はしやぐのはな関心しない。」

「そういえば…あはは。」

「あはは、じゃない！面倒見るこっちの身にもなってくれ!!」

額に手を当てて喚く、お父さん。怒る時に、読んでいた本に直ぐ様しおりを取り出して、挟むのだけは凄く速い。

あ、お粥が置いてある。湯気が立ってて美味しそう。

「とにかくマスクを戻せ。食べたいのは分かったから。俺に風邪が移る。」

「お父さん風邪引かないじゃん、大丈夫だよー。」

「じゃあこうしよう、お前のアホイイルスが俺に移るってことに。」

「ひ、ひどい!?実の可愛げな娘にアホとつケホツ!」

「言わんこつちやない、とにかく風邪のまま外に出るなよ?」

「ふぁーい…」

あー、ちよつと頭が重くなってきた。

冷めない内に食べて、大人しく寝ておこう…

「…おや、何処かへお出かけですか?あいろ先生。」

……寝かしつけたのか、大柄のサトリが階段を降りてくる。

如何にも疲れた表情をしているのは、お嬢さんに抵抗されたか否か…

「先生呼びは止めろと言ったろシヨウタ。そもそもお前さんが、こいしを止めていたら

悪化しなかったんだぞ。」

「あ……失礼致しました。しかして、あいろ先生、私の名前は下ではなく、苗字でお呼びをと申しておりましたが……」

「分かった分かった、んじゃワカバヤシ。出かけるから、こいしがまた外に出ようとしたら全力阻止だぞ?」

「ええ、ええ……存じておりますとも……。無事なお帰りをお待ちしております……あいろ殿……」

……大柄のサトリ、あいろ先生は別居中の、みつめ様とさとり様に寄りを戻しに話し合いへと向かう……

さして数刻も経たぬ内に、上から念を唱えんが如く、お嬢さんの言葉が淡々と落ちてくる。

「……始まりましたか……。」

……階段を上がれば、その念は音を張り上げる。さも淡々と、けれど麗しさを孕んだその声は、強く強く私の耳を通りゆく……

「りーぐす……くるらていあ……あざぶはあおきからさんさんに、あんびあーはみおろしせいをみさだめる……」

お嬢さんは、お粥を食した後に寝静まっていたのだろう……然しお嬢さんはココロをハ

イジャックされたように淡々と、強く強く念を唱える……

「……これで拾八度目、ヤハリあなたは彼の地を夢見ておらつしやる。……おちついて……思考を保ちなさい。けして自我を手放さぬよう……」

「きたるはろんこーすと……しんこくはやがてまくをおろし、きたるはゆる……しかしてそれは……こころをゆさぶるさだめ……」

「落ち着いて……おちついて……、あなたは正しい。思考を保ちなさい。けして自我を手放さぬよう、それがあなたを導く灯火となりますから……」

「……おそらく、そう遠くはない。彼等が参る、物語が始まる、私も成すべき事を成さなければ……」

「ぜうす……それは……はじまりをよび、おわりをつげるしんわなり……」

物語（せかい）は現実（ホンモノ）になる